

小学校家庭教育学級・MCR 学級 合同研修会 報告

1 目 的

- ・小学校家庭教育学級・MCR 学級生が、自らの子育てや家庭のあり方について学び、家庭教育力向上の機会とする。
- ・小学校家庭教育学級・MCR 学級生の学びの場を広げる一助とする。

2 日程・会場・参加者数

日 程 令和6年9月13日(金) 10:00～12:00(受付9:30～)
会 場 松戸市民会館301会議室
参加者 39名 一時預かり利用者 1名

3 内 容

○開会

主催者挨拶 松戸市教育委員会生涯学習部
社会教育課長 関 根 嗣 人 氏

○講演会

演 題 「特別支援教育の今、そしてこれから」
講 師 千葉県総合教育センター
研究指導主事 堀 子 榮 氏



4 概 要

今回の合同研修会では、特別支援教育について、その現状とこれからについての講演会を開催しました。

講師の堀子榮先生は、大きな柱として、ⅠはじめにⅡ子どもの人生のおおまかなスケジュールを考えるⅢ成功体験を増やせる環境での教育システムの構築Ⅳ特別支援教育のこれからⅤアートから考えるインクルーシブ教育を提示されました。講演ではまず、先に開催されたパリパラリンピックでのアスリートの活躍を紹介しながら先生の自己紹介をされ、これまでの豊富な経験からどの段階で特別支援教育に関わることがよいのか、また日本の特別支援教育のシステムと教育を受けた後も含めた人生のスケジュールについて考えました。通常級であっても、子どもを「叱ること」よりも、失敗を認めながら、徐々に失敗を減らし、成功を増やすことを大事にする。人に頼っていいことや、比較したほめ方は避け『叱ることを減らし、正しくほめることでレジリエンスを培わせる』ことの大切さを話されました。また、ユニバーサルデザインや合理的配慮についてもふれ、「対話の積み重ね」と互いに理解するプロセスを重視した「合意形成に向けた努力」がポイントであることも強調されました。これからの特別支援教育ということについては、さらなる高等教育を目指せるシステムの構築が課題であること、他国と比べるとまだまだ進んでいない状況や国内におけるさまざまな課題、そしてさまざまなアートを生み出している作品の紹介などがあり、充実した講演会となりました。

5 参加者の主な感想



・叱ることを減らし、ほめることを増やすことが大事だということを学びました。

・ぼんやりとしかわかっていなかった特別支援教育について理解できたと思います。

・教育の大切さ、特別が特別でなくなる事、誰もが持っている“困り事”それが人それぞれに違うんだという事、改めて何が大切な、大切にしたい事は何か、を考えるきっかけになりました。

・インクルーシブ教育の大切さ。「どの子にとってもその子の金メダルがある」という言葉はとても心に残りました。

・残念ながら日本の特別支援教育は他国に比べて遅れている事、国内でみると千葉県はまだまだ支援が行き届いていない現状に胸が痛くなりました。

・発達障害児(特にグレーゾーン)の家庭や学校での関わり合い方をもっと知りたいと思いました。